

総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会 [公開議題]

議事概要

- 日 時 令和5年3月30日(木) 9:50～10:48
- 場 所 中央合同庁舎第8号館6階623会議室
- 出席者 上山議員、梶原議員、梶田議員(We b)、佐藤議員(We b)、
篠原議員、波多野議員、菅議員、藤井議員
(事務局)
大塚内閣府審議官、井上審議官、高原審議官、次田参事官、松木参事官
(文部科学省科学技術・学術政策局)
山下総括官
(文部科学省高等教育局)
伊藤文部科学戦略官
(内閣官房)
森総理補佐官(We b)
(オブザーバ)
橋本内閣官房科学技術顧問、(文部科学省)井上総括審議官

- 議題 ・研究に専念する時間の確保について

○ 議事概要

午前9時50分 開会

○上山議員 皆様、おはようございます。今日は公開で総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会を開催させていただきます。

テーマは「研究に専念する時間の確保」についての最終取りまとめ案の御報告と、それに対する御意見ということになっております。この問題については、1年ぐらい掛けてまとめてまいりまして、よかったなと思うのは国際卓越大学や総合振興パッケージに間に合ったということで、1年ぐらい様々な形で議論いただきましたこと、そしてまた非常に大変な努力をしてくださって、松木参事官がまとめてくださって今日に至りました。お礼を申し上げたいと思います。

それに関する八つのテーマについてずっと議論を行ってきた訳ですが、このうち七つのテーマについては、昨年12月に既に地域振興総合パッケージの改定と連動すべく、各大学の行動変容を促すためのガイドラインとして議論を行わせていただきました。その結果として、パッケージの改定に反映することがある程度できたと考えております。残る一つのテーマである評価疲れについても、2月16日の木曜会合でも御議論いただきまして、実態把握のアンケート調査の方針についても御意見を頂いたところです。

本日はこれまでの議論を踏まえまして、研究に専念する時間の確保の最終取りまとめと評価疲れに関するアンケートについて御議論いただきたいと考えております。

では、内閣府の科技の事務局の松木参事官から説明をまずお願いいたします。

○松木参事官 内閣府の科学技術・イノベーション事務局担当参事官、松木です。

資料1に基づきまして御説明とさせていただきます。

3ページ目、御覧いただきたいと思います。先ほど上山議員から御説明ございましたとおり、ほぼ1年、去年3月からスタートして、いろいろここでもお時間を掛けて丁寧に御議論いただいたものです。研究時間というのはなかなか構造が見えにくいという中で、八つのテーマにブレークダウンして一個一個検討するという形でスタートしました。

ここにある八つのテーマのうち、研究DX、それから機器の共用、技術職員、URA、入試の負担軽減、教育と研究の役割分担を見直す、それから大学内の会議の削減といったようなことについては、これは研究時間の質と量、両方に関わるテーマです、いろいろ御議論をさせていただきまして、まず先ほど上山議員から御紹介ありましたとおり、大学のマネジメント層に向けたガイドラインという形で、地域振興パッケージとの連動をできたということです。具体的には先月2月のCSTI本会議において決定されました地域振興パッケージの改定の中にガイドラインとしてきちんと盛り込むということができたということです。

ただ、残る重要なテーマであります大学の評価疲れ申請疲れ、これは様々な御指摘を受けつつも、なかなかここではしっかり取り上げて議論はしてこなかったものですが、これについてはアンケートをしっかり実施して、研究者の困り事をファクトとして収集した上で分析し、また今後の木曜会合で継続して議論していくといったようなことを考えております。年度内に取りまとめということになっていたのも、最終取りまとめとはするのですが、議論は継続したいというふうに思っているということです。その全体像を示したのが3ページ目です。

それから4ページ目と5ページ目、一応最終まとめということにしてはおりますが、もともとの問題意識と申しますのが、研究時間の確保というのは政府だけが取り組むのでも不十分であ

るし、大学側だけに何か取組を求めるのも不十分であって、それぞれがそれぞれやるべきことをやるということで、初めて問題の解消に向かうというふうな意識で去年3月から議論を続けているということです。

そういった形で、一旦去年9月に中間まとめをさせていただきましたが、その際には政府の取組を中心に議論してきたので、右側にありますのは政府の取組というものが整理され、その後、大学のマネジメント層に対してどのようなことを求めるかということの後半戦で議論をし、それが地域振興パッケージとの連動という形でガイドラインという形で成果になったということです。これらをまとめることで、それぞれのテーマでそれぞれが何をすべきかといったようなことが全体像がやっとまとまったということで、これをもって最終まとめという形にさせていただきたいと。

本来的には研究者コミュニティがやるべきことというのも実はあるのではないかという御指摘もあったのですが、今回は政府がまとめるものとしては、この2者です。大学マネジメント層と政府という形で、この二つでまとめさせていただきました。

時間も限られていますので、ポイントですが、政府側の去年の中間まとめで整理した以降の動きなどを踏まえて変更した点がございまして、その点を中心に御説明させていただきます。

4ページ目の右下ですが、URAの質保証といったようなテーマを立てている訳ですが、その後、この場でもいろいろ議論させていただいた中に、ファンディングエージェンシー、JSPSとかJSTとか六つございまして、そういったところで基金だとか多く設けられて、プログラムマネジメント人材の確保というものが問題になってきているという認識も出てきていますので、URAだけではなくてPM、プログラムマネジメント人材も一体的に確保を考えていくといった方向性を右下のところに明記をさせていただきました。

それから5ページ目です。こちらは大学の入試の業務の負担軽減のところですが、これはつい先月、教学マネジメント指針追補版というものが文部科学省から出ておりまして、2月24日ですが、この中で過去の試験問題の活用などによって合理化を図り、入試の負担軽減について検討すべきであるというガイドラインを出していただいていますので、新しい動きとしてこれを追記させていただいております。

そのすぐ下ですが、創発的研究支援事業、こちらについては博士号取得後15年以内の若手に対して年間大体700万で7年、最長10年支援するという制度ですが、そのベースとなるものに加えて別途の支援ということで、そうした研究者がいらっしゃる大学が研究時間の確保などに尽力している場合は、それに対して、その取組を支援するためのお金をサポートすると

いったような部分が新しく予算が付いておりますので、これも研究時間確保のための重要な事業ということで追記をさせていただいております。

それから、その下、評価疲れ申請疲れ、これについては政府が取り組むべきことというのは中間まとめの時点では空欄になっていた訳ですが、こちらについてはアンケートをしっかりとやって、その結果を分析し、引き続き木曜会合で議論させていただきたいということで、そのことを明記させていただいております。

6 ページ目です。このような形で一旦取りまとめて、今後はフォローアップのフェーズに入っていくといったようなことを考えておまして、また並行してアンケートを実施、分析し、ここで今後検討していくといった流れを整理させていただいております。

次、7 ページ目以降、評価疲れの話ですが、アンケートを実施するといったときに、どういった項目でやっていくかということが非常に重要ですので、これをまた今日議論いただきたいということで御説明させていただきます。

8 ページ目を御覧いただきまして、2月16日、先月の木曜会合で、この場でまた議論いただきましたが、どのようなアンケートをやるべきかということです。その際には有識者議員の皆様からいろいろ様々な御意見を頂いたものを、このような四つに分類できるかなというふうに事務局で整理をいたしました。

一つ目は申請・報告に係る労力に関する御意見と思っております。申請書の内容が重複しているとか、それから研究費がいろいろ細切れになっていて少し困るとか、フォーマットが統一されていないとか、researchmap、便利な機能もあるのですが、更にそれは便利にできないのかといったような御意見があったと思います。

それから二つ目ですが、研究費制度の徒労感。現実に奪われる時間の話ではなくて徒労感です。何のためにこの分厚い報告書を書かされているのかとか、何のためにこんなに頻りに中間評価をやっているのかとか、そういった目的が明確でないと分かっていないために、徒労感を感じているという部分もあるのではないかというのが二つです。

三つ目は、挑戦的研究のための支援制度の在り方に関する御意見。ハイリスクでミッションオリエンテッドなファンドの枠の拡大が必要ではないかど、こうした挑戦的研究の重要性を指摘する御意見が多かったと思います。

四つ目です。研究者のアンケート自体の負担ですが、研究者の負担を軽減するためと称して、かえって研究者の負担を増やすようなことにならないよう、アンケートについては負担軽減にかなり留意をしてほしいといったような御意見があったと思います。

これらの御意見が4種類の御意見があったというふうに整理した上で、9ページ目を御覧いただきたいと思うのですが、事務局の中で検討いたしまして、アンケートの基本構成や項目についてはこのようなものでどうかという案です。

この部分を是非御意見いろいろ今日賜りたいと思っておりますが、まず四つの構成のうちの一つ目、回答者の基礎情報です。このアンケートは研究者とあと事務方及びU R Aに対してそれぞれ対象とするということを考えておりますが、個人が特定されないような匿名のアンケートにしたいと思っております。

それは2ポツ以降で具体的な事業名を挙げて困り事を言ってほしいからということなのですが、なので最低限のこちらの知りたい情報に絞って聞くということを考えておまして、回答者の基礎情報としては、まず属性です。研究者かU R Aか事務職か。所属機関、それから研究分野、職位、それから若手などと。若手かベテランかでまたいろいろ評価の疲れに対する考え方や困り事も違うのではないかというふうに思っております、この辺りもお聞きしたいと思っております。それから年間で必要となる経費。これはざっくりとした金額希望を聞くということで考えております。それから外部資金の獲得のための申請数や採択件数。これもざっくりとお聞きするというを考えております。

それから二つ目、被評価者。これは評価を受けるときの負担と評価をする側の負担とありますが、2ポツはまず評価を受ける際の負担の話です。よく競争的研究費についていろいろ御意見を賜るのですが、実際評価疲れを起こしている原因となるものというのは、競争的研究費以外のプロジェクト型支援制度、例えば産学連携もの、人材育成もの、ダイバーシティ推進もの、拠点形成ものとか様々ございますが、そういったものについても範囲に含める。さらには国以外、企業とか財団法人とかからいろいろもらっていると思いますが、あるいは機関評価や人事評価など、要するに評価を受ける被評価者としての立場に係るものは広くカバーした上で、困り事をお聞きするといったようなことを考えております。この際、米印で書いておりますが、回答したい事業の数だけページを追加、記入すると。つまり事業ごとに事業名、この何とか省あるいは何とかというファンディングエージェンシーのこうした事業の報告書が困っていると、というものを匿名で拾えたらなというふうに思っております、そういったものを拾っていくということを考えております。評価の必要性とか報告書の作成負担など、それぞれ5段階評価で聞くということです。

それから3ポツ、今度は評価をする側です。学外でいうと、外部資金の審査員、科研費のレビュアーとか、そうしたことを頼まれることも多いです、あと論文の査読、これもそこそこ

時間を取っていると思います。それから学会発表等の査読、人事の内部評価、卒論の審査と、これら評価に疲れているからといってやめる訳にはいかないものが多い訳ですが、ここでは評価疲れといったときには全体像をやはり把握したいと。いろんなものがあって、それは省略できないものも含まれているけど、全体的にここを疲れているのですよという全体を把握した上で、その中でできる部分が何かということを考えていくといったことを考えていまして、そうした意味でこれもお聞きしたいということです。

それから4ポツ目ですが、こちらどの事業にということではなくて、全体的にやはり言いたいことがあるといったような部分をピックアップするための自由記述の回答を設けたいと思っております。研究支援制度やサポート等の在り方としてと。例えば研究費が細分化されていて使いづらいと。一個一個細切れになっていて、しょっちゅう申請書ばかり書いているみたいな不満があるのかなということです。それから、申請可能な制度が分からないと。自分が何か研究費に応募しようとしたときに、どこの省庁とのファンディングエージェンシーからどういうものが公募が掛かっているのか分かりにくいという一部の御意見もあったので、そうしたものを例示しております。それから挑戦的な研究に取り組めない。それからe-Radの機能を強化してほしいといったような例示をしております。

ここ、例示をしないとやはりこちらが関心ある、重要だと思っていることが拾えないので、この例示をしっかりしたいと思うのですが、果たしてこの四つだけでいいのかとか、その辺りはやはりここでいろいろお考えを賜りたいというふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。それ以外の1、2、3のところも、こうした拾い方で本当に我々が欲しいものが拾えるのか。こうしたアンケートは相手方の負担を考えるとしょっちゅうやる訳にもいきませんので、1回できちんと今後の木曜会合にしっかりつなげられるようなファクトを、かつ相手の負担が余り増えないような形で拾っていくというためにはどうしたらよいかということを考えないといけないと思いますが、そのような観点から、是非いろいろな御意見を賜ればと思っております。

以上、説明が長くなりましたが、私からの説明は以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

1年間にわたって議論させていただきまして、七つの項目でまとめてきた訳ですけども、これやり始めたときに、当時橋本先生の方から学会に関わる様々な時間で若手の人が使われているという話があって、そこは正直言うと、やり切れなかったなという。後で橋本先生から御発言あると思いますが、学術会議等の関係で相当突っ込んだ議論をしないといけないかと思って、

振興パッケージまでには間に合わないかという感じもあって、これはもう少し長期的な話で多分出てくるのだと思いますが、そこを除いたところを大体まとめることができたということと、このアンケートについては、このアンケートすることによって、また現場に対する負担ということも考えないとなりませんが、これに基づいてまた逐次現場の環境改善に向けて議論していくことができるかなというふうに考えております。

以上にまとめ、時間の確保についての全体のまとめと、それからアンケートについて、今、松木参事官の方から御説明いただきましたけど、ここでまた最後になりますけど、先生方の御意見を頂いて最終案のまとめというふうにしたいと事務局としては考えているということです。

どなたでも結構ですけども、お手をお挙げくださればと思います。いかがでいらっしゃいますでしょうか。

藤井議員、どうぞよろしく申し上げます。

○藤井議員 ありがとうございます。松木さん、御説明ありがとうございました。

今回のアンケートで、回答者をどのように抽出するかということについて申し上げたいことがございます。基礎情報を回答者に書いてもらうという話になってはいますが、トライアルとして、どのように回答者の負担軽減ができるのか、あるいはe-R a dの機能で匿名にしたまま属性部分だけを取り出して、その人にこちらでは誰かが分からないような形で、だが、きちんとアクセスができるような使い方ができるのかとか、そうしたことも含めて少し検討してはどうかと思いました。

すなわち、資料9ページでは回答者に基礎情報を入力いただくようになっていますが、例えば、所属機関や経験、若手かどうかという経験年数、年間で使っているおおよその外部資金のレンジ、過去3年間の資金の累計などは、抽出すれば出てくるデータだと思います。その中で、もし可能であれば、ある分布の方を抽出して回答をお願いする、というのが本来やるべきことかなとも思います。e-R a dのシステムが一番あり得ると思うのですが、どのように使えるのかということも、これを通じてやってみるというのも一つの在り方ではないかと思います。回答者の基礎情報の部分をそれでほとんどクリアできると、回答する側にとっても非常に負担軽減になると思います。

また、若手かどうかに関しては、経験年数もありますが、年齢ではなくてむしろP Iとして独立しているかどうかや、独立してから何年経っているかといったようなことで考えるのがよろしかろうと思います。

それからもう一点、原案では5段階で答える部分が結構ありますが、例えば被評価者としての質問項目にも、どういう評価項目で非常に手間が掛かっている、あるいはかなりエフォートを割かなくてはいけないということを書けるような自由記述欄を設けていただきたく思います。例えば教育系のプログラムや授業などでは、卒業した学生がその後どのように活躍しているかとかいったものは、毎回毎回専攻レベルまでアンケートが回って、それに対して皆さん答えていく、ということが起こっています。学生さんがそれぞれどういことをやっているかというのは、多分研究室単位ぐらいでは把握はしていると思うのですが、集約のところはかなりエフォートが掛かっているのではないかと思います。一例ですが、これは本当に現場に聞いてみるということが必要だと思いますので、そうした自由記述ができるような、どういう部分がボトルネックになっているのかということが聞けるような、5段階だけではない質問項目を設けた方がいいのではないかと思います。

最後に評価者としての事項について、卒論、修論、博論の評価はもちろん負担の度合いを答えていただくのはいいと思いますが、こうしたものはそもそも本来業務なので、これは負担が多いとか少ないとかというよりは、これはきちっとやっていただかなくてはいけないことだと思いますので、その辺りは誤解が生じないような聞き方が必要かと思います。

私からは以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

e-Radの方はもうかなり整備だんだんしてきていますので、今のe-Radの使い方ですよね。使い方によって、この対象者を絞っていくということは白井さんのところで聞いてもらってやってください。

○松木参事官 御指摘を踏まえまして、できるだけ回答者の負担が減らせる工夫ができないかということは、またe-Radの担当者のグループともよく相談したいと思っております。

○上山議員 自由記述の求め方ということですよ。

○藤井議員 そうです。

○上山議員 松木参事官の方でまた検討してください。ありがとうございます。

梶田議員、いかがですか。

○梶田議員 御説明どうもありがとうございました。また、今までの議論をまとめていただきましてありがとうございます。

アンケートについて、9ページの項目を見た感じですが、評価疲れと申請疲れという二つの項目があると思うのですが、このページを見た限り、少し評価の方にウエートが高いように感

じました。申請疲れについてもしっかりと吸い上げられるようにアンケートしてほしいと思います。

というのは、具体的なことを例えば言うと、もし採択率が10%の競争的資金があると、9割の申請は採択されない。そして、大体このような機会というのは年に1回ということで、次の年にはまた頑張って改善して申請する。だけどやはり9割の確率で採択されないと、これを繰り返しているという状況もあると思っています。そうしているうちに世界の研究は進展して、もはやもともと申請では意味がなくなって、言わば徒労感だけが残るような、そうした感じになっていくような状況ではないかということも思う訳で、この辺りについて現場の声をうまく拾い上げるような、そうしたアンケートにしてほしいと思います。

それから、また同じ9ページの項目に関連してなのですが、この中に例えば教育改革プログラムが今まで数多く展開されてきていると思います。これらは大学単位とか、あるいは学部単位での申請で、これらに対応するために教員、それも恐らくシニアなエース級の教員がかなりの時間を取られてきているはずかと思っています。もちろん大学は研究機関でもあり、教育機関でもあるので、研究時間の確保を考えると、このような教育プログラムということについてどのように考えられているかという観点でのアンケートも必要ではないかと思っています。

これに関連して、特に教育プログラムに関する申請疲れというのもアンケートにうまく入れられないかと思っています。特にトップ大学でないところで必ずしも採択率が高なくて、先ほど言ったような申請疲れがより深刻になるような状況かなとも思うのですが、そこら辺がうまく拾えるような、そうしたアンケートにしてほしいと思います。

以上です。

○上山議員 先生の方で教育改革プログラムが乱立していて、それに対する申請疲れのことをもう少ししてくれという、そうしたことでよろしいですか。

○梶田議員 そうです。

○松木参事官 御指摘ありがとうございます。

先ほどの私の説明でプロジェクト型支援制度のところは割と研究系を並べてしまったのですが、こうしたものの中に教育系のプログラムも入るということを明示して、そういったものの不満も吸収できるような形でアンケート様式を工夫したいと思っています。ありがとうございます。

○上山議員 それについての自由記述のところでも出てくるかもしれませんよね。

○松木参事官 そうですね。例示に追加するなどして、4の方でも拾えるようにということ

を考えております。ありがとうございます。

○上山議員 ありがとうございます。

それでは、次は菅議員の後、篠原議員と。

○菅議員 ありがとうございます。

今日は多いのですが、三つ質問させてください。

最初は、入試に関することですが、これまでも多分、共通テスト、今、何ていう名前になっているのか分からないのですが、その多分業務が先生によっては当たって、大学の先生がそれをするということ、かなり負担なのですが、それは高校の例えば退職された先生たちをもっと活用するという方向性のことは議論されているのでしょうかという、これが一つ目の質問です。

二つ目の質問は、PM——プログラムマネジャー——これはURAというのは今とてもみんな広まったといいますか理解が進んでいると思いますけど、PMということになると各プログラムでアサインメントされるPMと、それからURAみたいな人がPMをする場合と二とおりあると思うのです。特にJSTで多分橋本先生は御存じか御存じではないかと思いますが、PM育成プログラムというのをJSTでずっと走っていて、私も5年間ぐらいずっとお手伝いさせていただいたのですが、そこを見ていると大体URA関連の人、あるいは企業の方が自分でプログラムを回したいというので、そこにトレーニングに来ているという例もあるのですが、その辺どれくらい広がって理解が進んでいるのかというのをお尋ねしたい。

最後ですが、先ほどの申請疲れについてですが、これは御説明していただいたときもコメント出したのですが、例えばアメリカのNIHは年に3回申請する時期があります。日本は1回しかない訳ですね。審査も1回に集中します。ところがNIHみたいに三つに3回に分かれていて、申請する人たちが自由にどこを選ぶかというのを調整できる訳です。だから、例えば二つ研究費を取りたいと思ったら、同じルールで回ってくるところに2回出したりはしない訳です。ばらして、3回のうち、どこか2回を取るとか、あと一回の方は、例えば審査の方に充てるとか、あるいは、自分の申請する時期というのは、4年に1回ぐらいなので、それを考えると、審査は申請したいときには休むという流れがあるのですが、そうしたことも将来、せっかく研究費が基金化されたのであれば、同時に考えていく方がいいのではないかと考えています。

以上です。

○上山議員 そうですね。3番目の点は本当にそうだと思います。あと、二つ目のところは、松木さんの方で答えられますか。

○松木参事官 少し答えが難しいのですが、URAについては、既に文部科学省の事業で質保証制度というものを、そもそもURAとは何か、またURAに求められる資質は何かということを整理した上で、研修プログラムとかも整備して、その質保証をすれば、全国に流動性が高まるだろうみたいな話があるのですが、プログラムマネジメント人材は、まだそうしたところまで、少しいけていないのかなと。

ただ、やはり、例えばプログラムマネジメント人材がファンディングエージェンシーで確保された、それが更に大学に流動していくときには、大学ではURAのプレアワードとして活躍、即戦力として活躍できるだろうというふうに思っています、そうした意味で、むしろ今後の課題ということで、PMとURAというものが、一体的に何か考えていく必要があるのではないかと、今回少し整理させていただいております。

○上山議員 入試のことは、少し僕は知らないのですが、どなたか知っていますか。

○伊藤高等教育局文部科学戦略官 文部科学省高等局です。

入試については、共通テストを今、大学入試センターと各大学が共同で実施をする形で実施をしてございます。ここにおいて、例えば試験監督などについて、その大学の教授でなければならぬとか、こうしたことは決して言っている訳ではないのですが、実際には様々な形で、例えば高校を試験会場で、地方などは一部借りてやっているところもございまして、御協力も頂いているところがあるのですが、やはりセンターと大学が共同で実施をする中で、何かトラブルが起きたときの対応のためにということで、どうしても大学の一定の監督がしっかりできる方々をお願いをする傾向が大変強いというのは、正直現実としては、実態としてはあるところですが、例えば作問の段階も含めて、できる限り、高校の退職者など、公的なしっかりとした立場の方の御協力を頂くということは、私どもとしても方向性としては十分あると思っておりますし、また、それは示してまいりたいと思っております。

○菅議員 試験監督もそうなのですが、実は試験作成の方ですね。その負担、めちゃくちゃしんどいのですよ。私もやったことがあります、要は大学の先生が高校の学生向けに大学の入試を作るときに、まず高校の教科書を勉強しないとイケないのですね。これは結構負担で、もうその時代時代で流れが変わっていて、それを一通り見て、しかもいろんな教科書を読んで、そこからどういう問題で、どのレベルの問題を作っていくかを考えなくちゃいけないのですね。

これは本当は高校の先生の方が絶対いいのですよ。退職された高校の先生を十分活用すれば、とてもいい問題も作れるし、その分、大学の先生がそこに入っていき、大学の先生も入らざるを得ないと思いますが、例えば試験を作るときに、1人か2人程度でよくて、もうそんな10

人もそこにいる必要はないとか、そうした形にはできないのかというのが私の質問です。

○伊藤高等教育局文部科学戦略官 すみません、分かりました。実際には、少し詳細にはなかなか、センターの作題のメンバー構成などについては、申し上げにくい面があるのですが、実際には高校側の方々にも大分入っていただきながら、当然高校教育段階で何を教わっているかどうかというのは、確認はさせていただいてございます。

ただ、同時に、センターも大変慎重にかつ複数の問題を作るという過程の中では、本当にたくさん大学の先生方に御協力いただいているのも事実ですので、またこの辺りについては、大学入試センターともよく相談をしながら進めてまいりたいと思います。

○上山議員 よろしいですか。

じゃ、ありがとうございます。

じゃ、その次は、波多野議員、どうぞ。

○波多野議員 ありがとうございます。様々な意見ができるところを構造化していただいたので、非常に議論しやすくなりました。助かります。ありがとうございます。

このアンケートでどのような回答を期待するかの一つとして、以前から申し上げていることにも関連し、先ほど菅議員がおっしゃったように、主に8ページの③の研究のための支援制度とその評価についてです。改革が必要と感じていますのでこのアンケートで意見が吸い上げられれば、と期待します。画期的なアイデアやプロジェクトをいつでも申請できる制度、国際的にも議論されていますが、挑戦的な研究や社会的インパクトの新たな評価方法、自由記述になってしまうかもしれませんが、それがうまく何か引き出せるようなアンケートにならないかというふうに思っています。特に新しい価値の創造を目的とした分野融合的な研究の評価について、ソーシャルインパクトの評価にういてなど、国際的には英国はじめ評価方法の見直しの議論が始まっていますが、そうした視座は入れていかないといけないかと思っています。

それと、もう少し細かいところで、属性のところに技術職員とかが入っていないのですね。これは研究時間を確保というところの中で、振興パッケージの中でも議論していますから、その属性は入っている方がよろしいかなというふうに思っています。コアファシリティが評価される側になっていたり、評価する側になったりしているというふうに、私は認識しています。

今後はチャットGPTなども併用することも検討してもいいかなと思いました。

以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

松木参事官、どうでしょうか。

○松木参事官 評価の在り方、やはり今の段階では、定量指標による評価が主流になっていて、そういった中には、定量的なものだけではかってほしくないという意見、もしかしたら研究者の側にあるかもしれません。そういったものがきちんと拾えるように、4ポツの自由記述の例示に少し追記させて、何か拾えるような工夫を例示したいというふうに思っております。

○波多野議員 私は価する側のときに、定量的な指標はそれほど参考にしていないのですが、実態はどうなのだろうと思います。

○上山議員 技術職員の話ですよ。

○松木参事官 技術職員についても評価を受けることが多くなっているということだと思しますので、こちらも回答者属性のところに含めさせていただきたいと思っております。ありがとうございます。

○上山議員 じゃ、篠原議員、どうぞ。

○篠原議員 ありがとうございます。最終まとめはこちらで良いと思うのですが、引き続き御検討いただきたい話として、菅議員からも何度か御意見が出ましたが、今、いろいろな教育が、いわゆる学科とか、そうしたところに閉じているところが、無駄ではないかという話もあります。それは単に無駄だけではなく、これからより新しい融合領域とかが出てきたときに、それを全ての大学、全ての学部、全ての学科で賄うことが本当にできるのかということを考えて上でも、どういう言葉を使ったらいいのかわかりませんが、授業のオープン化といいますか、授業の共有とか、そうしたところについても是非、これから先も御検討いただけたらと思ったのが1点目です。

アンケートですが、今、波多野議員がおっしゃった話ともかぶるのですが、例えば評価に不可欠な情報提供に本当に絞られているのだろうか、是非聞いていただきたいです。要するに、余計な情報が求められているのではないかということです。

これは、私も評価する側に回ったことがあるのですが、評価者にとってみると余計な情報なのですが、ひたすらアピールするために被評価者から大量に記載いただいているというのも実はあるのです。だから被評価者にとってやりやすいフォーマットと、評価者によってやりやすいフォーマットとは違うので、そこは違うのだということも意識しながら考える必要があると思います。少なくとも本当に評価に不可欠な情報提供に絞られているかということと、もし絞られていないと思うのだったら、不要な項目な何なのですかということ聞いてみることも大事だと、1点目は思っています。

2点目なのですが、さきほどの波多野議員もおっしゃった徒労感に関わる部分なのですが、

これからこのアンケートの結果に基づいて、改善に向けて手を打っていかなくてはいけない際に、やはり徒労感が大きくて無駄なものを、先に手を打たなくてはいけなくて、達成感がある程度あるものについては、例えば後に回してもいいと考えると、ここではあくまでも負担とか、そうしたことだけを書いていらっしゃるのですが、やはりそれをやった上での徒労感とか達成感みたいなものについても、達成感というのは言い過ぎなのかもしれないのですが、聞いてみる必要があるのではないかと。

というのも、私は創発の関係で、以前、小谷先生に学生のインタビューをしてもらいました。落選した学生へ聞いてもらったのですが、その学生は、今回これは大変だったが、やってよかったと。何でよかったかという、面接のときに先生から様々なコメントをもらえて、次につながったというふうな格好で、多分、単に大変なだけではなくて、大変だがそこから実のあるものが得られたというものも、場合によってはあるのではないかと考えております。

当然ながら、採択されたかどうかによっても、その考え方は多分違ってくると思いますので、採択されたかどうかと併せて、どのぐらい徒労感を覚えたのかというのを、徒労感の5から達成感の5まで、その中でどうなのですかということ聞いてみることも必要なのではないかと考えております。

先ほど言った被評価者にとって負担の大きいフォーマット、評価者にとって負担の大きいフォーマットというのは、少しびんとこないかもしれませんが、これは考えてみたら当たり前のことです。評価者からすると、とにかく自分でこうした基準で選んでいこうと思うと、その順番に並んでいるのがとてもやりやすいのです、効率的で。ただ、提案する側からすると、やはり自分たちの考えていることを、しっかり順序立てて提案していきたいと思っているので、そのミスマッチがどのぐらいあるのかなというのも、少し興味を持っています。

以上です。

○上山議員 ありがとうございます。非常に示唆的ですよね。フォーマット、何か質問事項の内容に関しても、また篠原議員と相談しながらで。

○松木参事官 今日伺った中で一番難しい話のような気がします。少しまたしっかり検討した上で、これでどうでしょうかというのを御相談させていただきます。

○上山議員 そうですね。あと達成感みたいなこと、確かにそれはあんまり、自由記述の中で拾えるかどうか、少し分からないですから、何か入れた方がいいかもしれませんね。

○松木参事官 少し検討させていただきます。

○上山議員 ありがとうございます。

ほか。

梶原議員、どうぞ。

○梶原議員 どうもありがとうございました。事前説明のときにも少しコメントしたのですが、アンケートをするということになると、アンケートを回答する側としては、何のためにという目的が明記されていることが望ましいというのは、当たり前のことです。先ほど徒労感という話もいろいろありましたが、何でやるのか、それをどのように使おうとしているのかという目的や、フィードバックをきちんとしていくということ、きちんとして記載して、協力してもらおうというのがいいと思っています。

誰に回答してもらおうかというところですが、どうやって抽出するか、ここに属性がありますが、例えば依頼する機関に対して、研究者、URA、事務職、あるいは技術職、技術職員というそれぞれの属性のうちどのくらいの割合の人たちに回答していただきたいのかというのを持っているのかどうかということですよ。どう抽出しているのかという点に関係するのかなと思うのですが、研究者だけではなくて、サポートする人たちのどのくらいの割合に回答してもらいたいかなどという狙いがあるのかどうかということを確認しておくといいと思いました。

また、アンケートの回答者の属性の中では、ここに若手という項目は記載があるのですが、ジェンダーの要素は入れないのでしょうかと思いました。そのときに今グローバルの流れでいいますと、ジェンダーを聞くときには、「男性」、「女性」、「答えない」というように、今までの男性、女性だけではなくて、三つ目の選択肢を入れているというのが主流ですし、企業でもそうした傾向になりつつあります。大学の方でもそうやっている大学もあるということなので、国として聞く場合も、そうしたジェンダーについての属性については、考慮されてはいかがかと思います。よろしくお願いします。

○上山議員 松木さん、どうですか。

○松木参事官 アンケートの規模感ですが、前提みたいなのが実は1個あって、事務負担軽減のためのアンケートというのを昔やったことがあります。令和2年ですが、それは事務負担軽減の関係府省申合せという形で、例えば消耗品のルールを統一するとか、全て電子申請にするとかという形で、政府統一ルールにつなげたというのがあるのですが、そのときは大体30から40くらいの機関に対して、アンケートを掛けまして、1,200人くらいの方が、これは任意ですが、回答いただいたと。同じくらいの規模感で今回やったとしたら、同じくらいの規模感で来るのかなというふうに思っております。

それが1点目と、あとジェンダーの観点については、この研究者の属性の1ポツのところに追記をさせていただいて、「男性」、「女性」、それから「答えない」という三つの選択肢でチェックボックスを設けるような形で考えたいと思います。

以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

佐藤議員、よろしくお願いします。

○佐藤議員 2点だけです。大学や研究所の中でのことについては、門外漢ですが、このアンケートのやり方について、2点ほど申し上げたいと思います。一つは、こうしたアンケートを何回もやる訳にはいかないということだとすると、アンケートの中でこちらからの質問だけではなくて、向こう側からの回答の中に、問題意識を書いてもらうことに加えて、それをどう変えてほしいのかという現場の意見というものも併せて書いてもらう方が、二度手間にならないような気がします。

もちろんそれは、その現場の意見ですから、それが全て採択されるとか、必ずしもそうした方向でやるということにはならないことは当たり前ですが、現場が何に苦しんでいるのかということを知りたいだけではなくて、どうしてほしいかということも一緒に聞いてしまった方がいいのではないかと思います。それが1点目です。

2点目ですが、先ほど篠原さんがおっしゃった徒労感の問題に関わることなのですが、徒労感の源泉というのは、一つは評価や申請に時間を取られるということですが、もう一つは、これだけの作業をしたのに、それがどうなってしまったのだろうか、どう取り扱われたのだろうかという、自分の作業へのフィードバックがないことに対する徒労感というのが、現場に大きな影響を与えているのではないかと思います。これも実務的には難しいと思いますが、アンケートをやったときに、そこから抽出された問題について、アンケートを出してくれた人たちに対して、正しくフィードバックするということによって、徒労感の3分の1ぐらいは解消されるのではないかと思います。以上2点を伺わせていただきたいと思います。

○上山議員 ありがとうございます。

松木さん、今の二つの点について。

○松木参事官 アンケート、どの部分に記載するかは別として、アンケートをする際には、問題点の指摘にとどまらず、もし解消のアイデアがあるのであれば、書いてほしいということをごくどこかに付記して、そういったものも吸い上げられるような工夫を少し考えたいと思います。

それから、徒労感の源泉の話です。フィードバックですね。アンケート調査に協力していた

だいた機関に対しては、結果がまとまった後に、お礼とともにこうした結果になりましたという
ことを、何らかの形でフィードバックをしたいと思っておりますが。

以上です。

○上山議員 じゃ、その点はきちんと考えていただければと思います。

佐藤議員、よろしいでしょうか。

○佐藤議員 ありがとうございます。よろしく申し上げます。

○上山議員 橋本先生、どうぞ。

○橋本内閣官房科学技術顧問 最初に、この研究に専念する時間確保に関して、最も重要な
のは、やはりそのために政府と、それから大学と、それから研究者コミュニティ、三方がみ
んな努力しないといけないのだよということを知らしめることが、何よりも重要だったと思っ
ているのですね。そうした意味で、今回それを明確に書いてくれたので、そこでしっかりとそ
れをみんなで、まず認識してもらうことが重要かなと思うので、第一歩として大変よかったと
思うのです。やはり、そうした意味において第一歩だと思うのですね。

その観点から2点申し上げると、1点目は、先ほど上山議員がおっしゃっていましたが、研
究者コミュニティの部分が今抜けているので、やはり研究者コミュニティのことは、しっ
かりとこれから検討していただかなければいけないと思うのですね。

具体的には、最初に少し出したが、学会が多過ぎるのではないかという話。そうすると、学
会の統廃合の話になると、これはなかなか大変なのだが、でも、そうした問題意識はきちんと
一回共有することと、それから現実問題として、みんな感じていると思うのですが、同じ話を
あちこちでしていますよね、今ね。それは、学会がたくさんあるというだけではなくて、だか
ら異分野融合が重要だとかと、すぐ言うのですが、それにしても多過ぎ、同じようなことを言
い過ぎているみたいなことがある。あるいは小さな研究会がたくさんあって、そうしたふうに
たくさん出ている。

こうした意味のある部分もあるのですが、それはウェブの会議を今やるようになってきてい
るから、そうしたものをどんどん使って、時間を有効に使うみたいなことを含めて、これは、
要するに言いたいことは、研究者コミュニティとしてどうやって研究時間を確保するのか、
自分たちができることというのを徹底して議論してもらうような、そうしたことをしてもら
う必要が、これはメッセージとして出す必要があるかなと思います。これが1点目です。

2点目は、政府がやることに関わる中で、申請疲れの話が出ていました。そのとおりなの
ですが、現状少しお話しいたしますと、申請疲れに関していうと、例えばJSTでは今、菅さん

にも入っていただいている、申請疲れの一つの大きなポイントは、たくさんの申請するプログラムが連立しているということなのですよ。それを今まとめています。かつ申請様式をできるだけ一致させるということを努力していますので、これは既に今、動いているところですが、どんどんよくしていきますので、それはそのような方向に行っているというふうに御理解ください。

ただ、これは個人ベースの申請もそうなのですが、政府全体でやっている組織改革的なもの、これは結構大きな負担になっているはずなのですよ、現場で。というのは、大体組織改革物で使われる人は、その大学で活躍している人で、大体同じ人がいつも集められるということになっていて、一番本来研究のアクティビティーの高い人が、そのたびに使われて、もう時間がとても使われている、これはみんな知っている話ですよ。

なので、それをどのように少なくするか、これはやはり政府の方が、一つはそうしたプログラムをできるだけやはりシンプリファイしていくという話と、それから、申請書類をできるだけ共通なものにして、意味あることだけ書かせるというふうなことをするということだと思えます。これはまだまだやることがあると思っていますので、そうした努力は必要かなと思っていますが、そうした問題を認識して改善しているということは、是非研究者コミュニティとか大学に発信していただきたいと思うのです。本当に日々頑張っています、そうしたことをやろうとしていますので。

それで、あと、システムを考えると、少し一言だけ。先ほど菅さんからNIHの話が出てきたり、よくそうしたのは出てくるのだが、いいシステムになっていると思います。

ただ、一つ理解しておいていただきたいのは、日本のJSTとJSPSのお金を合わせたお金の10倍以上が、NSFだけであるのです。予算が。それにNIHを入れると、それはまたドンと増える訳ですね。要するに、研究者人口がどれぐらい多いかという、二、三倍ですかね。それに対して実際にはファンディング、そうしたJSTとJSPSを足したような予算が、大体その20倍ぐらいあると思っています。事務スタッフもそれぐらいいます。そうした状況なのですね、実態は。やはりアメリカは巨大なのですよ。

だから、それをそのまま、アメリカがこうだから、日本もこうやれという訳にはいかない。だから、日本の中でどういうふうによいもの、日本ではどういうふうなものにしたらいかということを含めて、現場の意見をしっかり聞きながら、菅さんにも入ってもらって、そうした最先端で活躍している先生方に入ってもらって、一生懸命変えつつあるところですので、そこは理解していただくとともに、それは発信していただきたいと思うのですよ。

政府側が何もやっていない訳ではなくて、そこはとても意識をしていて、努力をしているところなので、いろんところで今、我々としては研究者現場の意見を吸い上げるための努力を、一生懸命していますが、吸い上げ切れないところもあるでしょうから、それは言うだけならば、有り難いなというふうに思います。

最後ですが、だからこれをやって、政府として本気になって、この研究時間確保の問題に取り組んでいる、それは政府だけではなくて、大学当局、それから研究者コミュニティー、みんなが努力していかなければいけないのだということを、改めて強調することが、このレポートを出すに当たって重要だと思しますので、コメントしておきます。

以上です。

○上山議員 ありがとうございます。これは1年掛けてずっと議論して、しかも大体公開でやってきましたから、我々とする、この問題に関して、かなりの労力と、それから発信をしていきたいという気持ちも非常にあります。しかもまた振興パッケージも含めて、実際の具体的な政策に落とし込めるようになってくると、より現場にはそれが伝わるという気がしますので、是非今の御指摘は本当にそのとおりだと思いますので、改めてそれを引き受けていきたいと思っておりますし、研究者コミュニティーの問題が非常に難しかったですね、いろいろ議論しても。

なかなかどういう形でそこを政府としてやっていくのかは、正直そんな短期間ではできないなど。学会の統廃合みたいな話に足をすくわれるのも嫌ですし、少し学術会議との関係も難しい現状で、少しコロナ禍にはまとめ切れなかったなというのが、事務局と少し話をしている状態ではありました。

それは少し反省として肝に銘じますが、一応こうした形で報告案を出させていただいて、また公開では、政府としては非常に重要な問題と考えているという情報発信をしていくということとを約束させていただいて……

○橋本内閣官房科学技術顧問 上山議員、少し一言だけ。ここが反省する必要はないと思っっているのですよ。余りここが研究者コミュニティーに対してこうやれとか、こうしたふうにガイドすることは、かえって反発を招くので、反省する必要はないと思いますよ。

ただ、重要なことは、我々はやることをやっている。だが、研究者コミュニティーの問題もあるはずだと。だからそれをしっかり研究者コミュニティーで考えてくれというメッセージを強く出すということが使命だと思います。

○上山議員 なるほど。分かりました。どういう形でどういう文言に今のお話を入れるかとい

うのは、少しこれもまた微妙な問題もありますから、考えさせていただきますが、はっきりときちんとしたファンディングを含めて、この時間の問題を考えているということは、先ほど言いましたようなフレームワークの中で、ある程度伝わっていくのではないかと思いますし、ここにいる先生方も、国際卓越や振興パッケージの中で審査員として入っておられる方も随分おられますので、そこでの発言にも恐らく反映されていくだろうという気がします。

あと、コミュニティーの問題は、少しきちんとして文章、どんな文言にするかは、また考えさせていただきますが、確かに今の御提案を踏まえまして、私たちとしての立場をどこかで表明していくということにさせていただきたいというふうに思います。

それでは、今いろんな意見を頂きましたので、これで最終的なまとめとしてさせていただきたいと思います。また、様々な御意見がありましたら、頂きましたら、微修正をしながら、最終的に我々の方で最終案としてまとめたいというふうに考えております。

評価疲れについては、今日、本当にいろんな御意見を頂きました。それを反映して、適切にアンケートの内容を決めまして、その分析結果に基づいて、また今後とも、この場で議論を続けていきたいと考えております。

それでは、ちょうど時間ぐらいになりましたので、この公開での研究に専念する時間の確保の最終まとめ案については、このような形でまとめさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

午前10時48分 閉会